



独りのとき

暗唱
聖句

「主なる神は言われた、『人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう』」（創世記 2 : 18、新共同訳）

「また主なる神は言われた、『人がひとりでいるのは良くない。彼のために、ふさわしい助け手を造ろう』」

（創世記 2 : 18、口語訳）

今週の
聖句

コヘレト 4 : 9 ~ 12、フィリピ 4 : 11 ~ 13、Iコリント 7 : 25 ~ 34、
創世記 37 : 34、イザヤ 54 : 5

安息日
午後
4/20

今週のテーマ

昔、興味深くも痛ましい一つの物語がニュースになりました。1人の若い女性がアパートで遺体となって見つかったのです。死は悲劇そのものですが、その物語を一層悲劇的にしたのは、遺体の女性が見つかるまでに10年以上経過していたという事実でした。10年です！ それゆえに当然のことながら、人々は疑問を投げかけました——「大勢の人がいて、通信手段もたくさんあるこんな大都会で、路上生活者でもない女性が、どうしてこれほど長い間、だれにも知られずに死んだままでいられたのだろうか」

この物語は極端ですが、多くの人が孤独に苦しんでいるという現実の一例です。2016年、ニューヨーク・タイムズ紙が、「孤独の蔓延まんえんに立ち向かう研究者たち」というタイトルの記事を掲載しました。この問題は現実のものです。

私たち人間は、最初から、独りでいるように意図されていたのではありません。エデンからずっと、私たちは程度の差こそあれ、ほかの人間との交わりの中で生きることになっていました。言うまでもなく、罪が入り込んで以来、何物も正しい状態にありません。今週、私たちは、人生のさまざまな時期における交わりと孤独の問題、たぶん私たちのだれもが人生のある時点で直面した問題について考えます。もしあなたにそのような体験がなければ、「自分は幸運だ」と思ってください。

コヘレト4:9～12を読んでください。独りでうまくやれる人はほとんどいません。たとえ私たちが一匹狼であれ、独りでいることが好きであれ、遅かれ早かれ、私たちは何らかの交わりを欲しいと思うだけでなく、とりわけ困ったときに、それを必要とさえます。確かに、私たちは共同体として生きるように、交わるように造られました。とりわけ困っているときに、慰めや支援を与えてくれる身近な家族を持つ人は、なんと幸運なことでしょう。

残念ながら、私たちの教会や職場や地域社会の中には、困ったときばかりか、毎日の終わりにちょっとした会話をするのに当てになる人さえいない人たちがいます。孤独感がいつでも押し寄せてきます。結婚していないある男性が言いました。「私にとっていちばんきついのは日曜日です。週日は、職場の仲間に囲まれていますし、安息日は、教会でみんなに会えます。でも日曜日は、まったく独りきりですから……」

問1 次の聖句から、特に私たちが孤独な時を経験する際に役立つどんな原則を学ぶことができますか。ヨハ16:32、33、フィリ4:11～13

確かに、私たちクリスチャンには、神が実在されるという現実とともに、神と交わることができるという現実があります。そして実際に、私たちは神との親密さによって慰めを得ることができます。エデンにおいて、神はアダムと親密であられました。が、それでも、「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう」（創2:18）とおっしゃいました。このように神は、罪によって傷ついていない世界でアダムが神と交わっていたときでさえ、彼には人間の交わりが必要であることをご存じだったのです。だとすれば、〔罪の世界に生きる〕私たちには、どれほど交わりが必要なことでしょう。

私たちはまた、周囲に大勢の人がいるというだけで、人間は孤独になるはずがない、と思わないように注意する必要があります。最も孤独な人たちの中には、他者ひんぼんと頻繁に交流のある大都市に住んでいる人がいるのです。単に他人に囲まれていることは、孤独や疎外や交わりの必要を感じないことを意味しません。

◆ だれが孤独、疎外、拒絶を感じているのか、あるいは（ほかのことはともかく）とにかく話し相手をほしいと感じているのかを知ることは、必ずしも容易ではありません。そうであるかもしれない人に対して、あなたはどうかしたら積極的にもっと敏感になれるでしょうか。

ある若い女性が、結婚しないことの利点についてこう語りました——「二度、私は伝道地に行って奉仕する機会があったのですが、何のためらいもなく、応じました」。結婚し、家族を持っている人なら、そのような決断を下すのにもう少し時間をかけなければならなかったかもしれません。なぜなら、その決断は本人だけでなく、伴侶も家族も巻き込むからです。

問2 パウロによれば、独身であり続けることのもっともな理由は何ですか。
I コリ 7: 25 ~ 34

結婚することは神の御旨であると、たいいてい人は考えます。「人が独りでいるのは良くない」と、神は言われなかったでしょうか。それにもかかわらず、聖書の中には、イエス・キリストを含め、結婚しなかった人の多くの実例があります。

エレミヤは、結婚してはならない、と言われました（エレ 16:1~3）。それは、ある歴史的状況に基づく判断でした。その制限がいつ取り除かれたのかはわかりませんが、エレミヤが独身時代に偉大な預言者であったことは明らかです。

エゼキエルの妻は突然亡くなりましたが、彼が結婚しているかどうかは、さほど重要ではなかったようです。彼は嘆くことさえ許されず、主から授けられた働きを続けなければなりません（エゼ 24:15~18）。預言者ホセアもまた、結婚生活の破綻を経験しましたが、働きを続けることができました。その物語は私たちには奇妙に思えますが、神はホセアに、いずれ彼のもとを去ってほかの男のところへ行くとわかっていた売春婦をめとりなさい、と言われました（ホセ 1章~3章）。今思えば、神がイスラエルや私たちに対する一方通行の愛を説明しようとなさっていたのだとわかりますが、ホセアにとって、自分が実物教訓となることは、極めてつらく痛ましかつたに違いありません。

これらの事例において、結婚しているかいないかは問題ではありません。神が関心を寄せておられたのは、その人の誠実さ、従順さ、神が語ってほしいと望まれることを語る能力でした。私たちの人生の意義は、結婚しているかいないかによって規定されないということを、私たちは確認する必要があります。今日、多くの声が、結婚しなければ私たちは不完全なのだ、と言うでしょう。しかしパウロなら、「あなたがたはこの世に倣ってはなりません」（ロマ 12:2）、むしろ「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい」（同 12:1）と答えるでしょう。

◆ 教会員であれ、非教会員であれ、結婚していない人たちに、あなたはどんな実際的な方法で支援することができますか。

罪が人間に打撃を与えたあらゆるものの中で、肉体的苦しみと死を別にして、家族よりも罪による破壊的結果に直面してきたものがあるでしょうか。「機能不全の家族」という言葉は、あたかも重ね言葉であるかのようです。多少なりとも機能不全でない家族とは、どんな家族でしょうか。

死を除いて、家族が直面しうる最もつらいことの一つは離婚です。この苛酷な経験を味わっている人たちは、ありとあらゆる感情を持ちます。最初に、かつ最もよく見られるのは、たぶん悲嘆であり、人によっては数か月から数年間、さまざまな強さで続くかもしれません。恐れを経験する人もいます。未知のものへの恐れ、経済的不安への恐れ、うまく対処できないことへの恐れなどです。抑うつ、怒り、そして孤独などの時期を経験する人もいるかもしれません。

問3 次の聖句から、離婚に関するどのような一般的原则を得ることができますか。マラ2:16、マタ5:31、32、19:8、Iコリ7:11～13

「教会はキリストの贖いを実践する機関として、教会員のすべての必要に奉仕するとともに、教会員が成熟したクリスチャン経験へと成長できるように、各人を教育し、訓練しなければならない。このことは特に、教会員が結婚のような一生に関わる決断に迫られるとき、または離婚という苦悩を負わなければならないときなどに当てはまる。結婚関係が破局の危機に直面しているカップルがいるならば、傷ついた関係の修復のために、聖なる原則に基づき、和解に向けてあらゆる努力が、その当事者の2人はもちろん、彼らを世話している家族や教会員たちによってなされなければならない（ホセア3:1～3、Iコリント7:10、11、13:4～7、ガラテヤ6:1）。

堅固なクリスチャンホームを築く上で、教会員に役立つ次のようなプログラムが、教会または教会関係機関を通して利用できる。

- (1) 結婚するカップルのためのオリエンテーションプログラム。
- (2) 結婚したカップルとその家族のための教育プログラム。
- (3) 崩壊した家庭と離婚した人のための支援プログラム」（『教会指針2015』204ページ）。

◆ 離婚を経験しているだれかを助けるうえで、あなたにできる実際的な方法、しかも裁かない方法は、どのようなものでしょうか。

かつて、ある人がこんな質問をしました——「死という問題に関して、人間と鶏にどんな違いがあるのだろうか」と。その答えはこうです。「人間も鶏も死ぬけれど、鶏と違って人間は、自分が死ぬことを知っている」。鶏は、自分が死ぬことを知りません。そして、私たちの現在の生き方に大きな影響を及ぼすものが、差し迫る死をこのように知っていることなのです。

ご存じのとおり、結婚を含むあらゆる関係は、遅かれ早かれ、私たちの最大の敵である死によって終わりを迎えます。どれほど親しい結びつきであれ、大きな愛であれ、深い交わりであれ、ともに過ごした時間であれ、(鶏と違って) 私たち人間は、遅かれ早かれ、(イエスがその前に戻られないなら) 死がやって来ること、そしてその時、私たちのすべての関係が終わることを知っています。これが最初の罪以来の人間の運命であり、それはイエスが戻られるまで続くのです。

聖書は、アダムとエバのどちらが先に死んだのかを記していませんが、とりわけ看取った者にとって、死はつらかったに違いありません。なぜなら、それは当初、人生の一部になるはずではなかったからです。先の課で触れたように、もし1枚の葉が枯れたことで彼らが嘆いたのなら、伴侶の死によって彼らがどのような体験をしたのか、だれが想像できるでしょうか。

問題は、私たちがあまりにも死に慣れていて、それを当然とみなしていることです。しかし死は、私たち人間が経験するはずのものでは決してありませんでした。それゆえ今日に至るまで、私たちは死の意味を理解しようともがいていますが、どうしても理解できないのです。

次の聖句は、いかに人々が死と格闘しているかについて教えています。イザ57:1、黙21:4、1テサ4:17、18、マタ5:4、サム下19:11 (口語訳18:33)、創37:34

間違いなく、私たちはみな、自分の死という現実と直面するだけでなく、他者の死、愛する者たちの死、最も近い仲間の死という現実にも直面します。それゆえ、遅かれ早かれ、私たちの多くは、だれかの死によってもたらされる孤独の時、孤独の季節を迎えるでしょう。それはつらく、痛ましいので、私たちはそのような時に、神の約束を自分のものとして訴えることができますし、しばしば訴えなければなりません。結局のところ、罪のこの世には、苦しみや死のほかにも、何があるのでしょうか。

◆ 愛する人を亡くして孤独感に苦しんでいるとわかっている人たちを、あなたの教会はいかに助けることができますか。

ナタリーという名の若い女性は、友人に招かれて地元のアドベンチスト教会で開催された連続伝道講演会に出席したのですが、その時すでに、結婚生活を7年間送っていました。学んだことに確信を持った彼女は、キリストに献身し、新生を経験し、(夫、自分の両親、義理の両親、はたまた隣家の人たちの猛烈な反対にもかかわらず) アドベンチスト教会に加わりました。ナタリーはまた、自分の生活スタイルを新たに見いだした信仰にできるだけ合わせました。

想像どおり、彼女はひどい抵抗に遭いましたが、それを特につらくしたのは、彼女のご主人でした。彼は次のように正論を主張したのです——「これは、ぼくたちが結婚したときに契約したことじゃない。君はすっかり別人だ。ぼくは昔の君に戻ってほしいんだ」と。

ここ数年、彼女は信仰生活を送るために苦しんできました。結婚はしているものの、彼女は、いわゆる「靈的独身」状態なのです。

問4 次の聖句の中に、靈的独身状態にあると感じている人へのどんな励ましの言葉を、私たちは見いだしますか。イザ 54：5、ホセ 2：21、22 (口語訳 2：19、20)、詩編 72：12

世界中の私たちの教会には「ナタリー」がいます。男であれ、女であれ、このような人たちは結婚しているものの、独りで教会に通うか、子どもたちとだけ一緒に通っています。彼らは異なる信仰を持つ人と結婚しているかもしれませんが、あるいは、彼らが教会に加わったとき、伴侶はそうしなかったのかもしれませんが、あるいは、結婚したときに、夫婦はともに教会員だったのに、何らかの理由で、脱落し、来なくなり、信仰に対して敵意すら持っているかもしれません。このような男女が、独りで教会へ行き、礼拝後の食事に参加し、独りで教会の伝道や社会活動に出ています。彼らは、自分が望むほど経済的に教会の働きに貢献できないとき、悲しくなります。彼らの伴侶がそうすることに同意しないからです。結婚はしているものの、彼らは靈的なやもめ／男やもめのように感じているかもしれません。

過去のある時点で、私たちはみな、このような人たちに教会の中でたぶん会っているでしょう。彼らは私たちの愛情と支えを必要としています。

◆ 教会の家族として、私たちの中で靈的独身状態にある人を助けるために、私たちはどんな実際的なことができますか。

「エノクは、活動的生活を送りながらも、変わることなく神との交わりを保った。仕事が増え、忙しさが増すにつれて、彼の祈りは、ますます絶え間なく、熱心になっていった。彼は一定の期間、すべての交際を絶つという生活を続けた。彼は、しばらく人々の間にて、教えと模範によって彼らのために働いたあと、ただ神だけが与えることのできる天来の知識を飢えかわくように求めて、人を選けて孤独の時を過ごすのであった。エノクは、こうして、神と交わることによって、ますます神のみかたちを反映するようになった。彼の顔には、イエスのみ顔に輝く清い光が輝いていた。彼が、こうした神との交わりからもどってきたときには、神を信じないものさえ畏敬の念に打たれて、彼の顔に押された天のしるしをながめた」（『希望への光』45 ページ、『人類のあけぼの』上巻83 ページ）。

ここでのエノクの物語は、孤独な時を過ごすことを選ぶ人たちについて語る際に励ましとなりますし、力強いものを持っていますが、大多数の人は求めていない孤独に直面するものです。彼らは独りになりたいと思いません。改めて言いますが、確かに私たちは、絶えず存在される主と楽しい交わりをいつでも持つことができます。しかし時として、人間との交わりを切望するのです。毎週安息日に、私たちの隣に座っていながら、孤独な厳しい季節を過ごしている人たちに、私たちが教会として手を差し伸べられるように備えておくことは、なんと重要でしょう。その一方で、もしあなたがそのような時を過ごしているなら、教会（やほかの場所）であなたが信頼できると感じるだれかを探し、その人に伝えてください。多くの場合、私たちはだれかを見るだけで、その人が経験していることをすぐには理解できません。少なくともある人たちにとって、仮面の裏に隠れることはたやすいからです。

話し合いのための質問

- ① あなたの所属教会は、みなさんの中にいる孤独な人たちの必要に、どうしたらもっと敏感になれるでしょうか。
- ② 安息日のクラスで、耐え難い孤独を経験した時について話してください。何があなたの助けになりましたか。何があなたを傷つけましたか。ほかの人の助けになるどんなことを、あなたは学びましたか。